令和3年度 学校経営計画・学校評価

□4月5日提出　□10月15日提出　■3月15日提出

高知県の教育の基本理念	(1)学ぶ意欲にあふれ、心豊かでたくましく夢に向かって羽ばたく子どもたち (2)郷土への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、日本や高知の未来を切り拓く人材	取組の方向性	①チーム学校の推進 ②厳しい環境にある子どもへの支援や子どもの多様性に応じた教育の充実 ③デジタル社会に向けた教育の推進 ④地域との連携・協働
目指すべき姿 学校像	「HARD SPIRIT 貫徹精神」の下、幅広い知識と教養を身につけ、逞しく豊かな心身を培い、郷土や我が国さらには国際社会の発展に貢献する志を涵養し、国際人として大局的な視点に立って行動できる人間の育成を目指す学校。	目指すべき姿を実現するための取組等	1 学びの習慣の確立と学力の向上 2 特別活動と部活動の充実 3 グローバル教育の推進 4 英語運用能力の向上と国際交流活動の推進 5 学習環境の整備 6 関係機関との連携・協力 7 探究学習を通した教育振興
目指すべき姿 生徒像	1 確かな学力が定着した生徒　2 逞しく豊かな心身を持った生徒 3 社会に貢献する志をもった生徒　4大局的な視点を持った生徒		

学校番号	26	高知西　高等学校	課程	全

学校関係者評価

【学力の向上】　評価　【 A 】
大学入試については新入試2年目で、共通テストの結果も厳しい面もあったが、学校としてしっかり対応できており昨年度に引き続き、推薦入試・一般入試とも一定成果をあげている。また、英語運用能力の向上については、SGHから掲げた目標を確実に達成しており、素晴らしい成果を上げているのではないかと思う。クロームブックが生徒1人に1台となるので、授業と家庭学習を連動させ、家庭学習の意義を生徒に認識させるなど、学習のあり方や方法を含め地道な指導や工夫で大学進学の実績につながるよう生徒も先生方も頑張ってもらいたい。

【社会性の育成】　評価　【 A 】
本年度もコロナ禍で様々な学校行事や大会が中止や延期、規模縮小になったが、部活動も含め、生徒たちは工夫を凝らしながら積極的に参加をし、結果も残している。来年度は高知西高校として最後の年となるので、さらに良い結果を残すことを願っている。SGH事業の取組の結果として、「グローバル探究で取り組んだことを大学でもさらに深く研究したい」、「将来は行政職で、地域の課題に向き合い地域活性化に尽力したい」など、より具体的な進学理由や将来の夢を持って、推薦入試に積極的にチャレンジする生徒が増えている。

【チーム学校】　評価　【 A 】
本年度もコロナ禍で、昨年度以上に大変な日々が続いたが、校長を中心に教職員が協力し合ってできる限りのことを工夫して教育活動に取り組んでいる。新規事業に引き継いだ探究的な学習も、コロナ禍で非常に制約があったと思うが、2年ぶりの国際シンポジウムも外部委員に高い評価してもらうなどしっかりと成果を出している。来年度は高知西高校として最後の年となるが、高知西高校として素晴らしい成果を残して、しっかりと高知国際高校に引き継いでもらいたい。

（評価）A：目標を十分に達成　B：目標を概ね達成　C：やや不十分　D：不十分

《重点項目：生徒に対する取組項目》

	育成を目指す資質・能力【P】	現状と目標（評価指標）	具体的な取組内容 【D】	中間評価 【C】		中間評価後の取組内容【P・D】	年度末評価 【C】		見直しのポイント 【A】
学力の向上	○基礎的・基本的な知識及び技能 ○思考力、判断力、表現力等 ○主体的に学習に取り組む態度（学習習慣を含む）	【2年】 ①学習時間　100時間/月 （R2: 100時間/月 12%　60時間/月 55%） ②国・数・英3教科総合の平均点偏差値50．0以上（R2: 49） 各教科の平均点偏差値53．0以上（R2: 50程度） ③図書貸出数600冊/年 （R2: 383冊） 【3年】 ①国公立大学合格者100名以上 （R2: 104 名）	・授業と連動した宿題（課題）を行わせることで、学習習慣の定着と実力養成を図る。 ・学習意欲の向上を図るため、進路目標の早期の決定を促すとともに、LH等を活用して進路意識を高める機会を増やす。 ・教育プラットフォームのClassiを活用して学習の自己管理できるように指導を徹底する。また、模試との連動で、各生徒が弱点補強できるようにする。 ・教科の取組を学年団でも共通認識を持ち、連携を強化する。 ・学年通信を発行し、生徒の取組を評価するとともに、学習意欲の向上を図る。 ・グローカル探究やグローバル探究でリサーチペーパーを作成することにより、考える力や判断力、表現力の向上を図る。 ・リサーチペーパーの作成を通して、図書の活用を推進する。 ・総合型選抜・学校推薦型選抜の面接・小論文指導を全教職員で対応する。 ・大学入試新テスト、新学習指導要領を踏まえ、各教科で研究・協議を行い、思考力、判断力、表現力を高める授業に努める。 ・国公立大学に合格できる実力をつけるためにも、模擬試験の分析結果を教科でしっかり行い、授業や定期テストにも反映する。また、教科のシラバス自体を見直し、大学入学共通テストだけでなく、2次試験に対応できるようにする。	C	評価時期：前期期末前（9月下旬に職員会議で中間評価を確認） ●7月模試3教科の平均偏差値 2年生 50.3（昨年度49.0） ＊国 52.7　数 47.8　英 51.6 3年生 47.0（昨年度47.4） ＊国 49.2　数 46.4　英 49.3 ●学習時間（平日/休日） ＊スタディーサポート結果等より 45分/103分（2年） 125分/182分（3年） ○図書貸し出し数（7月末） 2年279冊（昨年度131冊） 3年281冊（昨年度160冊） *学習習慣の定着には、教科及び学年の横の連携を強め、目的意識、学習意欲を高め、徹底する必要がある。部活動の加入率が高いので、進路希望に向けた隙間時間の活用の意識づけも行う。	・学習習慣の定着していない生徒への個別指導を徹底するため、教科担任面談を実施し、学習に関する悩みを改善し、学力の向上を目指す。定期テスト前の学年集会や学年通信等で学習時間や成績の実態や計画的な学習の必要性を折に触れて伝える。（2年） ・国公立大学の総合型選抜、学校推薦型選抜志望の生徒への指導・対応に並行して、一般試験受験を想定した個々に応じた学習指導（模試の分析等含む）を粘り づく り行い最後まであきらめずに取り組む姿勢を養う。（3年） ・これまでも模擬試験等の分析を行う学力検討会は行ってきたが、より実効性を伴うよう、模試の結果を実際の授業等の取組にどうつなげていくかの対策に重点を置いた分析、協議を行う。（全体）	B	●1月模試3教科の平均偏差値 2年生 48.6（昨年度46.7） ＊国 50.8（50.4）　数 46.1（43.9）　英 51.5（50.5） ●学習時間（平日/休日） ＊スタディーサポート結果等より 69分/128分（2年） ○図書貸し出し数（1月末） 2年420冊（昨年度383冊） 3年577冊（昨年度593冊） ・国公立大学合格者数　109名（3月28日現在）	・1人1台のクロームブックを活用し思考力、表現力、判断力を育成するための教科指導（授業・課題）を研究、実践する。 ・教育プラットフォームのClassiを活用して学習の自己管理できるように指導を徹底する。また、模試との連動で、各生徒が弱点補強するとともに、粘り強く進路指導を行う。 ・来年度は最後の3年生となるため、なお一層、模擬試験の分析結果を教科でしっかり行い、授業や定期テストにも反映しながら、大学入学共通テストだけでなく、2次試験に対応できる実力を養成し。国公立大学100名以上の合格につなげる。
社会性の育成	○コミュニケーション能力 （かかわる力） ○キャリアデザイン能力 （やりぬく力）	【2年】 ①グローカル探究Ⅱへの能動的・積極的な参加 ②社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒の割合50%以上（R2: 41.5%） ③政治的教養として社会の諸課題について多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を養う。 【3年】 ①社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒の割合70%以上（R2: 49%） ②政治的教養として社会の課題を見出し、探究し解決する力を養う。	【2年】 ・国連が提唱する世界の諸課題SDGsの関連を意識しながら、生徒が興味関心を持ったものについて、グループ別にプロジェクトを立ち上げ、フィールドワークや成果発表会を行う。 【3年】 ・生徒が各自でテーマを設定し、個人で研究し、リサーチペーパーを作成する。 【全体】 ・学校が主催する国際シンポジウムでは、例年行われている海外からの招へいが困難な場合は、県内の留学生に参加をお願いして、テーマを決めてディスカッションを行う。	B	○本年度も生徒の興味関心に基づいて探究テーマを設定し、各グループが探究活動を進めている。また、探究チームの人数を減らすことで、チーム内で考える時間をとり、探究の意義を生徒たちがとらえることができている。（2年） ○個人によるリサーチペーパー作成が終了。本年度も進路指導部及び国語科と連携をすることで、より進路に根差した取組ができており、総合選抜型や学校推薦型の入試にチャレンジする生徒が多い。（3年） ○国際シンポジウムはコロナ禍で県内大学の留学生の参加もできなくなり、最終県内のALT等の協力をいただき、実施することができた。2年ぶりの開催となったが、発表内容も充実しており、運営指導員からもお褒めの言葉をいただいた。（全体）	・昨年度に続き、本年度もコロナ禍の中で、校外活動が自粛・制限されているため、校内において、校外で得られる経験ができる限りできるようZoom等も活用しながら外部講師の効果的な招聘などを行う。（2年） ・探究活動の取組を活用して国公立大学の総合型選抜、学校推薦型選抜を受験する生徒も多く、取り組んだ内容を簡潔に要点をつかんだ口頭での説明や志願者理由書等への記述ができるよう、管理職も含めた教員全体での指導を行っていく。（3年） ・国際シンポジウムでの取組も含め、今後校外で実施される様々な活動（オンラインを含む）にも積極的に参加し、プレゼンのスキルアップを図る。（全体）	A	【成果】 ・グローバル探究等の活動を通しての社会貢献意識の高まり 全体 86.1%（R2 87.9%　R1 88.4%） ・問題発見力や解決力が身に付いた。 発見力　全体 83.5%　解決力　全体 84.6% ・国際シンポジウムや探究成果発表会では2年生のポスターセッション、2年生代表の発表ともに、回数を追うごとにレベルがかなり向上したとの外部評価をいただいた。 ・グローバル探究で身に付けたプレゼン力や思考力を活かす総合型選抜入試や学校推薦型選抜入試に積極的にチャレンジする生徒が多くなり。合格率も上がってきた。 （年度：合格率）　H28 59.3%・H29 55.7%・H30 56.7% R1 58.3%・R2 64.1%・R3 63.5% 【課題】 ・来年度も、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の特例校として、これまでのSGHで培った取り組みを精選して継続し、高知国際高校に生徒の進路実現につながる探究学習を継承していく必要がある。	・来年度もグローカル探究の探究領域と各教科の関連性を見極め連携することで、探究と教科指導を可能な限り融合させる。 ・探究学習指導の教員間でのノウハウはかなり進んできており、大学の総合型選抜や学校推薦型選抜入試の結果にもつながっており、来年度も校内研修の実施等による教員の指導方法の共有を図る。 ・コロナ感染状況が長期化する中、コロナ感染対策をしっかり取りながら社会貢献活動や自己研鑽活動に生徒が取り組めるよう、情報提供やサポート体制を今後も継続する。

《チーム学校：教職員が取り組む項目》

	取組のねらい【P】	現状と目標（評価指標）	具体的な取組内容 【D】	中間評価 【C】		中間評価後の取組内容【P・D】	年度末評価 【C】		見直しのポイント 【A】
授業改善	主体的・対話的で深い学びにつながるとともに、進路実現に必要な学力を身につける授業の実現	【学校評価アンケートにおいて】 ①「授業を通して学力が身について思う」の回答85%以上（R2:84.0%） ②「家庭学習に十分に取り組んでいる」の回答60%以上　（R2: 51.9%）	・グローカル探究（2年）・グローバル探究（3年）通して、探究活動を実施する。 ・全学年の教科会を定期的に行い、効果的な教授法等を共有する。特に大学入試新テスト、新学習指導要領を踏まえ、各教科で研究・協議を行い、ICT機器も活用しながら思考力、判断力、表現力を高める授業に努める。 ・教科担当による面談を実施する。	B	○本年度もコロナ禍の影響を受けているが、昨年度の経験・反省も生かしながらが、柱となる生徒の探究活動は積極的に行われている。 ○教科会は定期的に行っており、生徒の学習状況が共有されている。また、前期中間試験後には、2年生が教科面談を実施し、苦手科目の学習方法について学べる機会を作る。	・今後の生徒一人一人のパソコン導入に向けて、校内研修も定期的に実施するとともに、ICT機器を活用した授業づくりに向けて各教員に研究してもらう。機器使用の形が授業で整えば、思考、判断、表現力の視点での授業研究を深める。	B	○学校評価アンケートにおいて ①「授業を通して学力が身について思う」の回答82．8% ②「家庭学習に十分に取り組んでいる」の回答57．3% ＊年度当初の目標で①は若干下降、②は昨年度よりは大きく上昇したが、目標値にはそれぞれ若干及ばなかった。	・学校の評価・評定だけでなく、外部試験での結果にもつながるように、模擬試験の分析結果を教科でしっかり行い、授業や定期テストにも反映する。 ・1人1台のクロームブックを活用し思考力、表現力、判断力を育成するための教科指導（授業・課題）を研究、実践する。
生徒理解 生徒支援	生徒が生き生きと学校生活を送ることができる環境や体制の充実	①皆勤者の割合50%（R2: 48%） ②学校適応2年100%（R2:99.3%←昨年度現2年生が1年次の数値） ③学校評価アンケートにおいて「入学してよかった」の回答90%以上（R2: 93.4%）	・中学校への聞き取り状況も確認しながら、2・3年生の支援にあたる ・生徒サポート部による毎週の情報共有会及び校内ケース会・校内支援委員会の実施（適宜） ・高校生活についてのアンケートの実施（5月、11月）	A	◎皆勤 前期中間数値（昨年度1学期末） 2年 73.6%（72.6%） 3年 71.6%（73.2%） ●学校適応2年 98.6%（4名進路変更） ◎部活動加入率（昨年度） 2・3年生 96%（87.5%）目標8割以上 ○高校生活アンケート（5月） 学校が楽しい（2年生：89.7%） 入学してよかった（3年生：91.6%）	・各学年とも皆勤は例年通りの数値であるが、2年生を中心に長欠傾向になっている生徒もおり、SC・SSWを含め生徒サポート部を中心に、ケース会・校内支援委員会でしっかり情報共有を図り、個々に応じた支援をスピード感を持って行う。	B	・皆勤率 2年　123人（44.4%） 3年　117人（42.5%） ・学校適応 2年　97.1%（8名進路変更等） ・学校生活アンケート 「入学してよかった」の回答 90%（昨年度93.4%） *コロナ禍で多くの学校行事が中止や延期・縮小になっていることの影響が考えられる	・生徒の状況に応じた研修会を実施する。 ・校内連携の強化。特に校内支援委員会のメンバーとの連携強化を行う。 ・定期的なサポート連絡会（部会）の開催する。 ・来年度は最後の3年生となるため、ホーム担任や保健室とも連携を取りながら、気になる生徒、見守りが必要な生徒についてはしっかり情報を供しながら学校全体で生徒支援に取り組む。
学校の振興	・SGH事業で培った探究学習を活かし、国公立大学への進学実績の更なる向上 ・英語運用能力の向上と国際交流活動を通じたグローバル教育の推進	【2年】（GTECを指標とする） ①英検準2級（CEFR：A2レベル）程度：普通科80%以上取得（R2: 84.7%） ②英検2級（CEFR：B1レベル）程度：普通科10%以上（R2: 9.7%） 英語科50%以上（R2:60%）取得 ③英語ディベート全国大会出場 ④将来にわたって国際的な視野でグローバルな地域課題を解決したいと考える生徒の割合50%以上　（R2: 47.8%） 【3年】 ①英検2級（CEFR：B1レベル）程度：普通科20%以上、英語科100%取得 （R2: 14.0%）　（R2: 89.4%） ②英検準1級（CEFR：B2レベル）程度：3名取得（R2：6名） ③国公立大学合格者100名以上（R2:104 名） ＊CEFR（セファール：語学力のレベルを示す国際標準規格）	・2次試験対策を年間計画に位置付けて、授業の中でも行う。 ・都道府県又は全国規模で実施されるスピーチコンテストやディベート大会等の情報共有や参加奨励、開催時期に合わせた適切な指導を行う。 ・2年次では大学入学共通テストに備えた思考力、表現力を問う問題を意識した授業や生徒への課題を考えるとともに、4技能の対応できる英語運用能力を養う。 ・3年次では、様々な教材を活用した2次試験対策（読解や表現）を実施する。 ・SGH事業で培った国際シンポジウムでは、コロナ禍で海外の連携校等から生徒を招聘できなければインターネット等を活用した、英語での交流を行う。	B	◎英語運用能力の向上 2年は高1時GTEC結果 (コロナ感染拡大のため、8月実施予定のGTECを12月に変更) 3年普通科は高2時GTEC・英検結果 英語科は本年度GTEC・英検結果 ○CEFR：A2レベル（英検準2級） 2年　普通科158名(66%) ○CEFR：B1レベル（英検2級） 2年　普通科　4名（1.7%） 英語科　17名（43.6%） 3年　普通科　32名（13.6%） 英語科　30名（75.0%） ○CEFR：B2レベル（英検準1級） 英語科3名 7.5%(達成) ◎グローバル教育の推進 ・本年度もコロナ禍で、様々な海外関連の行事が中止になる中、国際シンポジウムは県内のALT等に協力いただき、グループ発表、ディスカッションとも、運営委員に高評価をいただくなど、成功裏に終えることができた。県内の各種コンテストも今後開催可能なものには積極的に参加する予定である。	・外部試験の結果と昨年度初めて行われた大学入試共通テストの結果の相関関係については必ずしも一致しておらず、読解は複数の情報源から概要・要点を把握する設問、リスニングは目的に応じた思考力、判断力が問われる設問など、今後はその内容も踏まえた授業改善の必要があり。外部試験だけで完結するのではなく、授業を通じて総合的に4技能の育成を目指す指導を研究・実践する。 ・国公立大学の総合型選抜や学校推薦1・2など、志願の条件に英語の外部試験が入っていることも多いことから、今後もその周知を行うとともに、英検やGTEC等の問題に取り組み、教科書や問題演習における既習事項などを指摘しながら説明することで、日々の学習とのつながりを意識させる。 ・国際シンポジウムが今年は実施でき、成果が出たことで、英語科及び普通科「英語課題探究」選択生徒は、、ディスカッションやプレゼンテーションの演習の経験を活かし、希望進路につなげられるよう、今後も生徒のモチベーションを下げないような工夫した指導を行う。	A	◎英語運用能力の向上 ①CEFR：A2レベル（英検準2級レベル）以上 2年　普通科 215名（92%） 英語科　38名（100%） CEFR：B1レベル（英検2級レベル）以上 2年　普通科　22名（9.4%） 英語科　26名（68.4%） 3年　普通科　34名（14.4%） 英語科　31名（79.5%） CEFR：B2レベル（英検準1級レベル）以上 3年　英語科5名（12.5%（達成） ②各種大会結果 ・高知県英語ディベート大会出場 ・Glocal High School Meetings 2022英語発表部門銅賞 ・高知県高等学校国際教育生徒研究発表会 1チーム出場し、第2位（普通科） ・全国高校生フォーラム参加 ・WWL・SGH×探究甲子園2022(英語部門)出場 ・四国高校生探究活動発表会参加 *本年度もコロナ禍で、様々な大会がWeb開催となる ③国公立大学合格者　109名（3月28日現在）	・来年度は最後の高校3年生となるため、進路指導についてはスケジュール感を持って、どの力をいつまでに、どの程度つけるべきかを生徒と共有して指導する。 ・日々の授業や課題のほか、各種テストや検定試験などへのチャレンジも積極的に行うことの大切さを日々伝えていく。 ・共通テストだけでなく、2次試験に対応できる力をつけさせるべく、シラバスを含め実質10か月間の授業・補習設計を入念に考えて実施する。 ・英語については外部試験も活用しながら4技能をバランスよく鍛える授業を継続して行う。 ・SGH事業及び後継事業の探究学習によりプレゼンの経験が豊富になり、今年度はコロナ禍で制限されたが各種コンテストへの参加が増えるなどの成果が出ている。英語のプレゼンについては、ネイティブ教員も含め、英語科全員で指導にあたる。
働き方改革	・教職員の健康を守り、研さんの時間を確保して、授業力向上等を図る。 ・働きやすい環境を整え、仕事の効率化を図る。	○本年度も運営委員会、職員会において、ICT機器（タブレット）活用すること で、印刷物、時間の省力化を図る。 ○各教科ICT機器を授業改善にも導入し、課題の量から質への転換を図る。 ○年間360時間、月45時間以内の時間外勤務達成に向けて、時間外勤務の大部分が部活動指導に関わるものであったので、部活動ガイドラインや県の指針をもとに練習計画を量より質への転換を図る。	○会議等のICT機器（タブレット）活用はもとより、Classiを活用して、生徒・保護者への情報発信もペーパーレス化して印刷物や時間の省力化につなげる。 ○授業に連動した課題にして、授業内で確認ができるようにし、授業外での点検の時間を減らす。 ICT機器の活用して、補助プリント等の内容の精選をすることで、作成時間の省力化を図る。 ○部活動については、県のシステムを活用しながら、面談等で管理職と部活動顧問間で確認をしながら量より質の転換を図る。	B	○タブレットによる会議は定着、またできるだけメールや掲示板を活用した資料提示など印刷物や時間の省力化につながっている。 ●コロナ禍の影響があったものの今年は県体も変則的に実施、四国大会や全国大会なども実施され、4月から7月における月45時間の時間外勤務者の割合は6.9%で部活動指導に関わる時間外が大半を占めた。	・今後もタブレットによる会議を継続実施し、できる限りペーパーレス化を行い、印刷等の時間の省力化を図る。 ・職員会については、運営委員会で審議事項と連絡事項に分けて職員会は審議事項に絞り、できる限り効率的で時間のかからない職員会にする。 ・個別面談で、時間外勤務が多い教員については改めて部活動を含めた業務の見直し、効率化を話し合い、改善に向けて取組を促す。	B	・タブレットによる職員会議は定着し、印刷に係る時間や印刷紙の大きな節約となり、一定業務量の削減につながった。 ・個別面談で、時間外勤務が多い教員については改めて部活動を含めた業務の見直し、効率化を話し合いを行った。コロナ禍により、多くの大会や合宿等が実施されなかったため、例年と比べると部活動に関する時間外は少なかった。一方、推薦入試の指導に係る時間外が多くなる結果となった。	・タブレットの活用は今後も促進する。 ・本年度は特にコロナ感染拡大防止による部活動の制限が多かった。来年度の状況にもよるが、部活動の指導については、年間の大会スケジュールを踏まえ、量より質の練習計画（定期的な休みを含む）への転換を今後も図ってもらうよう継続して指導・助言を行う。